

つなぎ言葉Fillerと関連性： *you see*と*you know*の議論から*

山田大介

This paper focuses on the tiny filling marker, *you see*, which is often called as a filler. Applying relevance theory, which is one of the frameworks of cognitive pragmatics, we attempt to propose its unitary semantic meaning. To attempt to present its meaning, the meaning of the filler *you know* discussed by Yamada (2007) has also been discussed, as both of these fillers are similar in meaning, and therefore it may be well worth comparing them. As in Yamada above, the filler *you know* has been categorised as concerning the explicit side, especially at the higher-level explicature of utterances, and in contributing to a procedural meaning. This paper discusses the fact that the filler *you see* has actually been categorised as meaning the same as *you know*, but I propose here that their meanings are fundamentally different. This difference comes from the assumption that both speaker and hearer have. Both *you know* and *you see* can be considered as markers that the speaker asks the hearer to deal with metarepresented assumption. However, the use of *you see* implies that the speaker expects the hearer to take the lead in making more shared assumptions for both of them, than in the use of *you know*.

キーワード：関連性理論, Filler (つなぎ言葉), *you see*, 手続き的意味, 高次表意

1. はじめに

本論は発話と発話の間に挿入的に頻繁に起こるつなぎ言葉（以下Fill-

er^(注1)) と呼ばれる語を、*you know*と*you see*というFillerの代表的なものと考えられる表現を取り上げ、関連性理論 (relevance theory) の枠組みを使って分析するものである。両者の持つ意味機能を提示することによって、Fillerとしてのそれらの特質を明らかにする。これらFillerは、インフォーマルな語として最近まであまり多く研究対象とされて来なかった。また近年の研究においても、様々な呼ばれ方をされ、正確な定義立てや、明確な分類をされて来っていない。例えば、verbal fillerやfumbles, softeners, pause-filler, hesitation-markers, cajolers, discourse markers, pragmatic particles, turn-holders, pragmatic expressions (Brown, 2006; Crystal and Davy, 1975; Erman, 1987; Quirk, Greenbaum, Leech, and Svartvik, 1972を参照) などと呼ばれてきている。実際にはこれらの用語によって指し示される語は多岐に渡り、統一的な概念が掴めない。ある研究では細かすぎる分類がなされたり、またある研究では大まかすぎる議論である場合もある。つまり議論や意味の提示が当該の例に限られ、そのほとんどがその場しのぎ的な提示に過ぎず、統一的な説明がなされてきていないと言ってもよい。

本論の目指すところは、体系的にその意味を明らかにされて来なかったFillerを、関連性理論の立場で説明を試みるものである。特に、Yamada (2007) で提示した*you know*の分析を基盤として、*you see*の持つ意味を議論提示し、そこからFillerと称される語の様な意味を議論したい。関連性理論という認知語用論によって、その機能と意味が明らかにされることを提示したい。

まずFillerの定義立てとして、本論で議論しようしている*you see*と*you know*の立場を明確にする。上に述べたように様々な提示がされ統一的な説明がなされていないこのマーカ―をFillerという名称で定義立てをする。そして、本論の理論的基盤となる関連性理論の枠組みを紹介しながら*you know*の分析を示す。次に、*you see*の分析によって現れる多様な表れから、*you see*の持つ意味として様なものを考察する。Fillerとしての意味機能として、両者に共通するものは何か、そしてそれぞれの形式に持つ機能はどこで異なるのかを考察する。一つの意味が、その使用において語用論的に多岐に現れ、話し手が聞き手に指示するものが異なる様を提示する。

2. Fillerと関連性理論

2-1. Fillerとは

単にFillerと言っているが、実際にはどのようなものなのであろうか。議論へ入る前に本論で触れるFillerの定義立てをしておく必要がある。一般的に*you see*や*you know*に限らず*oh, well, wow, then*や*so, because, and, but, or*といった談話標識語 (discourse markers) と呼ばれるものは、それ自体に概念としての意味を持つことは無い。すなわち、現れる文自体の意味を変えることはないマーカ―として考えられるものである。Swan (2005) はこれらのマーカ―の持つ機能として、まず、1) 当該のマーカ―が発せられた文とその発せられたコンテキストとをつなげる役割を持ち、さらに2) そのマーカ―が発する話し手の態度を表すものであるとしている。またSchiffrin (1986) は、*you see, you know, oh, well, wow, then*などの語をparticles (指標詞) と、*so, because, and, but, or*などを連結語 (connectives) と分類している。本論で取り扱うのは、前者のparticlesに分類されるものである。Brown (2006) でも説明しているように、これらのマーカ―は会話や談話の間に頻繁に起こり、当該の会話や談話を穴埋め (filling) したり補助 (supporting) をする機能を持つものであるとする。

2-2. 関連性理論

本論の理論的枠組みである関連性理論では、語の持つ概念的 (conceptual) ・手続き的 (procedural) 情報という意味論的区別と、発話の明示的 (explicit) ・非明示的 (implicit) 側面への貢献という語用論的区別が理論の中心の一つである^(注2)。発話解釈には推論が欠かせないが、推論的発話理解の実際を認知的に妥当な語用論理論として発展させようとした試みが関連性理論である。関連性理論の持つ認知的色合いは、社会的特性を持っていた従来の語用論 (グライスなど) と対照的であり、認知語用論としての特質を明確にしている。Sperber and Wilson (1995) によって提唱され、多くの分野に影響を与えてきた語用論理論である。

2-3. 概念的情報と手続き的情報の区別

話し手が何かを発しようとするとき、話し手の頭の中にある無限の概念をピックアップし、それを言語記号の上に乗せる。ほとんどの語は心的概念の情報を記号化し論理形式を作り上げる。しかし、Blakemore (1987)

が初めて指摘したように、概念表示の構成素とはならず、解釈の仮説を打ち立てる道案内の役割を演じている言語形式が区別される。言語形式の概念的情報の記号化と手続き的情報の記号化を区別したのである。関連性理論は、語が記号化できる意味として、命題表示構築と表示算定という伝達の二つの側面の区別に呼応して、二つのタイプを区別する。

ではこの手続き的情報の記号化とは、一体どのようなことなのか。Blakemore (1987, 1992, 2002) に従って、(1)にある二つの発話例によって考えてみよう。

- (1) Ben can open Tom's safe; He knows the combination of Tom's safe.
 a. Ben can open Tom's safe.
 b. Ben knows the combination of Tom's safe.

(Blakemore, 1987)

(1)の二発話解釈の際、(1a)と(1b)の間に話し手がどのようなつながりを意図したかは通常明らかであろう。しかし、(1a)の解釈に照らして、(1b)の関連性をいかに達成するかを考えた時、この発話を処理することで、どのような効果を引き出すことを意図しているのかが必ずしも明らかではない場合がある。例えば(1a)が(1b)を結論に導く前提(premise)あるいは証拠(evidence)として見られることもあるし、逆に(1b)が前提で(1a)を結論としてみることを意図していることもある。よって、話し手が(1a)と(1b)の間に意図している推論関係がどのようなものであるかを指示するための言語的手段を用いるとなれば、それは極めて有効な手段である。(2)におけるsoと(3)のafter all、(4)のbutはまさにこの機能に沿うものである。

- (2) Ben can open Tom's safe. **So** he knows the combination of Tom's safe.
 (3) Ben can open Tom's safe. **After all** he knows the combination of Tom's safe.

(Blakemore, 1987)

- (4) Ben can open Tom's safe. **But** he does not know the combination

of Tom's safe.

Soの使用は(1a)を前提として(1b)が(1a)の文脈含意、すなわち結論として処理されることを指示し、一方after allは(1b)が(1a)の証拠として使用されることを指示する。つまり後続発話が既存の想定を強めることを示唆する。さらに、butの使用によって第一発話から引き出される想定(ベンはトムの金庫の暗証番号を知っているだろう)を打ち消すよう意図している。すなわち、butの使用は先行発話から導かれる命題内容が後続発話と矛盾すること、したがってこの想定を削除するよう指示する。どのような発話も呼び出し得る文脈想定と、引き出され得る認知効果の掛け合わせは無限と言っていいほどである。したがって、話し手はsoやafter all、butのような言語表現を用いて特定の推論関係を際立たせ、発話解釈過程の推論面に制約を課し、よって聞き手が使う推論の可能性の範囲を狭め、二発話間の意図された関係を聞き手に提示することになる。この制約は処理にかかる労力を減じ、適切な認知効果を手に入れるよう仕組みられた推論処理メカニズムなのである。

話し手がこれらの形式を使用するのは、特定の推論の方向に際立ち(salience)を与え、推論の行く先の認知効果をポイントするためである(武内, 2005)。関連性は認知効果が多いほど増し、その派生に要求される処理労力の量に応じて減ずるが、意図された認知効果を同定するための手続きを記号化している表現を用いることによって最小のコストで関連性を達するという話し手の目的と一致することになる。(2)-(4)に見られるように、談話連結語を使用することによって、処理労力は増すが、聞き手の認知効果の探求をより容易にするということで、関連性の原理に適い、処理能力は相殺されると説明される。Blakemore (1987, 1992)では、概念的・手続き的区別がそのまま真理条件的・非真理条件的区別と一致すると考えられていた。1990年代に入る頃から、両者の関係が横断的に論じられる様になり、非真理条件的意味と手続きの意味が必ずしも結びついていないこと、及び推意だけでなく、表意への制約もあることが明らかになってきている(Wilson and Sperber, 1993; 武内, 1993)。

話し手が達成するよう意図している認知効果のありかと道筋を指示するというのが、このsoやafter all、butといった語の意味で、これら談話連結語は発話解釈において、聞き手の推論に制約を課しているという。先行発

話とこれら連結語が続く後続発話との間の発話解釈における推論面に制約を課している。しかしながら、Yamada (2007) で議論したように*you know*は*so*や*after all*, *but*の談話連結語とは性質の異なるものである。それは、*you know*の話し手が聞き手にどう解釈して欲しいかということを知り手さんにポイントするという手続きを示している。以下の*you know*の現れる発話を見てみる。

- (5) A: I suppose that it's summer in New Zealand now.
 B: Yes, it is. But, **you know**, the weather is not much better than here at the moment.
 (Yamada, 2007, p. 6; Blakemore, 2002, p. 96より修正)

(5)の*you know*の使用において、「今はニュージーランドでは夏である」という先行発話の命題内容に対して、Bは「この時期のニュージーランドの天気は良くない」ということを聞き手Aに主張する。Bは*you know*を使用することで、AにBの知っている事実として（Aが実際知っているか知らないかは別として）、夏の時期のニュージーランドは天気が悪いということを知らしめる。*You know*は、*so*や*after all*, *but*と同じ様に、先行発話の解釈が、後続発話の解釈に影響することで談話連結語と考えられるが、これらの連結語とは異なり、話し手が聞き手に解釈されるコンテキストを探させるという手続きを示している。つまり特定の推論の方向にポイントするという認知効果を有し、聞き手の発話の処理能力を下げる役割をしている。談話連結語同様、命題表示には貢献しないが、命題表示の処理に関する指令を記号化しているものと解される。その点でFillerも談話連結語と同様に概念ではなく、手続きに貢献する言語標識であると考えられる。

2-4. 発話の表意と推意

関連性理論のもう一つの柱は、語用論的側面として、伝達の明示的側面と非明示的側面を区別したことである。これは、ある思考を言語形式に乗せるとき、どの程度明示的に言語化するのか、また逆にどの程度明示的にしないのかという区別のことである。この明示性についてSperber and Wilson (1995) は次のように定義する。

(6) Explicitness (明示性):

An assumption communicated by an utterance U is explicit if and only if it is a development of a logical form encoded by U.

(Sperber and Wilson, 1995, p. 182)

この定義は、話し手の伝達しようと意図した想定は、明示的内容である表意 (explicature) と、非明示的想定である推意 (implicature) のどちらかに入ると主張するものである。この定義によれば、表意とは当該の発話が記号化している論理形式の発展である。文法論からのアウトプットである論理形式は命題に準じる概念的表示であり、論理的に不完全な論理形式から聞き手がたどる過程は、「完全命題」と「発話行為または命題表示態度の記述」を含むものである。すなわち、表意は言語的解釈と語用論的推論の両方から導き出されるものということになる。一方で、推意は表意でない伝達されたあらゆる想定、つまりその概念的内容は推論のみで供給されるものである。次の(7)の発話のBの応答を考えてみたい。

- (7) A: How is Mary feeling after her first year at university?
 B: She didn't get enough units and can't continue.
 (8) Mary Jones didn't get enough university course units to qualify for second year study, and as a result, Mary cannot continue with university study.
 (9) Mary Jones is not feeling at all happy about this.
 (Carston, 1988, p. 155)

(7)Bの発話から(8)の表意と(9)の推意が伝達される。表意である(8)は、解釈作業と語用論的推論によって伝達される想定である。しかし(9)の推意は(8)の表意に加えて、文脈想定を基に推論によってのみ伝達される想定である。しかしながら表意の復元はこれだけではない。

3. You knowの分析

3-1. 手続きの記号化とyou know

*You know*は*so*, *after all*, *but*と同様に命題内容に関わらない言語表現である。*You know*は一見して、(10)の*frankly*のような発話副詞、(11)の

*on the record*や*off the record*のような態度副詞, そして(12)における*please*のように発話行為に付加される表現は, 命題に対する話し手のコメントをするという点で共通すると思われる(武内, 2012を参照)。

- (10) **Frankly**, his teaching is boring.
 (11) Peter: What can I tell our readers about your private life?
 Mary: **On the record**, I'm happily married: **off the record**, I'm about to divorce.
 (12) **Please** leave immediately.

しかしながら, (10)の*frankly*, (11)の*on the record*と*off the record*は概念情報を有していると考えられ, 一方*please*は概念としての意味を持たず, 話し手上位という情報を記号化していることと考えられる。*You know*は*please*などと同様に手続き的情報を記号化すると思われる。その証拠として以下のように挙げられる。まず第一に, *you know*は(10)-(11)の表現と異なり, これという意味を特定出来ない。第二に, 語の持つ語彙の構成に関わる (compositionality) 問題である。概念を記号化しているのであれば, 他の概念的表現と結びついて, より大きな概念表示を形成することが可能であろう。例えば(11)の文副詞*Frankly*は, *frankly speaking*, *to be frank*のように概念を足すことで概念の拡張をすることが出来る。しかしながら*you know*にはそれが出来ないのは明らかである。さらに第三に, *you know*が単独で使用される可能性があるということがある。以上のことから, 関連性理論の枠組みで, *you know*は概念ではなく, 手続きを記号化している言語形式であると考えられる。

3-2. 高次表意への制約

関連性理論では, グライス以降の他の語用理論とは異なり, 明示的に伝達される内容が発話の命題内容にとどまらない想定を表示する存在を範疇化する。つまり, 発話命題の外にあり, 命題を包み込む性格を持つレベルを想定した表意の存在がある。これを高次表意 (higher-level explication) という。先ほどの例に戻って見る。(10)-(12)に見られる太字の表現は, 命題内容の外にあり, 命題を包み命題提示態度を表明していると考えられる。関連性理論では高次表意として記述される。(10)の*frankly*の

ような発話副詞, (11)の*on the record*や*off the record*のような態度副詞, そして(12)における*please*のように発話行為に付加される表現はその典型的なものである。これらの表現は関連性理論の枠組みでは, 表出命題に貢献せず, 高次表意に貢献する言語表現であるものとして議論されてきた(Clark, 1993; Ifantidou-Trouki, 1993; Wharton, 2003; Wilson and Sperber, 1993)。しかしながら, (10)や(11)に見られる副詞的な表現は概念を記号化していると考えられるが, 一方(12)のような命題提示態度表現は手続きを記号化している議論されてきている(Clark, 1993)。

ここで議論する*you know*や*you see*といったFiller表現は, 後者, 高次表意レベルで記号化している言語表現であると以降で分析していくつもりである。実際に, *you know*の議論では, *you know*を発話の明示的側面である高次表意に貢献し, 概念ではなく手続きに関わる言語表現であると分析した。この*you know*の議論では, Blakemore (2002) の*well*の議論を基にしている^(注3)。Blakemoreは*well*も*please*と同様に, 高次表意に関わる手続き的表現であると説明する。(13)のやりとりにおける*you know*発話を見つめる。

- (13) [Talking about the tickets they are going to obtain]
 Tom: I'm going to get the tickets.
 Mary: The tickets?
 Tom: **You know**, the circus tickets.
 (14) (a) They are the circus tickets.
 (b) Tom says that they are the circus tickets.
 (c) The speaker should know that they are the circus tickets.
 (d) The speaker wants you to remember that they are the circus tickets.

トムの第二発話は, 様々な表意が聞き手に伝達されると期待される。(14a)は基礎表意であり, (14b)-(14d)は高次表意である。*you know*の使用は話し手の命題態度に関与するものとして分析される。つまり, (14b)における発話行為スキーマの中に埋め込まれるだけでなく, (14c)や(14d)のような態度も伝えていると考えられる。言わば, *you know*は, 当該発話の命題に対して, 話し手の態度を示すものである。その点におい

て、さきほどの(9)の*frankly*の例((15a)として再掲)と、(15b)に挙げる*unfortunately*の文副詞の例と機能の似ているものと言えよう。Fillerもこれら文副詞も、文頭にでも文末にでも現れることは可能であるし、話し手の命題態度に関与し、発話の高次表意に関与するものであると考えられる。

しかし同じ性質のものではない。次の例を見てみたい。

- (15) a. **Frankly**, his teaching is boring.
 b. **Unfortunately**, we need to leave soon.
 (16) a. I tell you **frankly** that his teaching is boring.
 b. It is **unfortunate** that we need to leave soon.

(15)に示した文副詞は(16)の様に節の中に埋め込むことを可能にする。しかし、*you know*の場合、(17)と(18)に見られるように、文副詞のそれと同様に埋め込むことは容認されない。

- (17) **You know**, we need to leave soon.
 (18) a. ?I tell you **you know** that we need to leave soon.
 b. *It is **you know** that we need to leave soon.

確かに文副詞も*you know*も命題の外にあり、したがって高次表意に貢献する言語形式である。(15)-(18)で見たように、*you know*も文副詞や態度副詞と違って、命題提示態度を示すということは明らかであろう。その態度とは、その発話された命題に密接に関係している命題内容そのものに対する要請、つまり話し手が意図していることを十分に認識するようにという指示である。

(13)の例に戻って考えてみよう。おそらくメアリーはそのチケットがサーカスであるということを知らない(もしくは忘れていた)かもしれない。メアリーがそのチケットをトムが買ってくれることを忘れていた、あるいは知らなかったことをトムは知っている。つまり、*you know*の使用により、聞き手であるメアリーに伝達したいことは(14')のようになると考えられる。

- (13') Tom wants Mary to remember that they are the circus tickets.

(14b-d)と比較しても(13')は間違いなくトムの発話の*you know*は高次表示に属するものと考えられる。手続き的に*you know*が記号化していることは、*you know*発話の表出命題に対する話し手の態度である。この*you know*の意味は、表出命題内容を聞き手が十分に認識して欲しいという欲求を、聞き手に伝えようとするマーカーとなるようなものとして考えられる。さらに次の例を見てみたい。

- (19) A : I may catch a cold, and need some medicine.
 B : **You know**, they say an apple a day keeps the doctor away?
 (19') We do not have to take medicine if we have an apple a day.

(19)のBにおける*you know*は、(13)と少し異なる。つまり、*you know*節の命題内容は、一般的に知られていることである。聞き手は必ずしも発話の関連性があることに気づいていないかもしれない。この場合、*you know*発話は、聞き手Aに何かを尋ねようとしているのではない。話し手は、表出命題と関連のある(19')のような想定を聞き手にもたらそうとしている。言い換えると、(19)Bの*you know*の使用は、話し手のこの情報意図を聞き手に認識してもらいたいという欲求を伝達しているのである。*You know*がこのように使用された時、概念的意味は消え、伝達されるのはこのような話し手の態度なのである。

話し手が聞き手に知らしめよう、認識してもらいたいとしているのは何に拠るものなのであろうか。(13)の例を改めて考察してみたい。

- (13) [Talking about the tickets they are going to obtain]
 Tom: I'm going to get the tickets.
 Mary: The tickets?
 Tom: **You know**, the circus tickets.

表意: Tom is going to get the circus tickets.

- (13') Tom wants Mary to remember that they are the circus tickets.
 (13'') Because Mary and Tom are going to a circus they have to get the ticket to go to the circus.

トムの*you know*発話の表意は上にある通りであるが、*you know*の使用により、(13')に示されるように話し手は聞き手へ表意の内容を認識するよう求める。この根拠は何なのであろうか。トムがサーカスのチケットを手に入れようとしているのであるが、二人がサーカスへ行く約束をメアリーは忘れていたのかもしれない。トムの発話の関連性はこのことを聞き手のメアリーに思い出させること、つまり(13')のような想定を認識させることである。*You know*はこの話し手の情報意図をより容易く聞き手がピックアップするよう仕向けるのである。

ここに*you know*の持つ意味機能として、(20)のような手続きを記号化していると提示した(Yamada, 2007, p. 35)。

(20) Q. *you know*. P

P: The proposition expressed of the utterance introduced by *you know*

R: The metarepresented assumption from P

Q: The ground or reason for R (an assumption the speaker has from previous utterances)

*You know*の意味: Qを根拠にしてPからRを呼び出せ

Qは*you know*発話に先行する発話で、Pは*you know*発話である。*You know*発話からメタ表示させた想定Rは、Pの理由や根拠となる元表示であり、Qと整合する想定である。*You know*の使用は、*you know*発話の表出命題からこの理由や根拠とする想定を派生させRとする。これは話し手のPに対するコメントであり、Rの理由(言うなれば、話し手の*you know*発話の理由や根拠に成りうるものであるが)になる。*You know*の使用によって、Pから元表示を導出させた想定をRとする。したがって*you know*は、先行発話と*you know*発話間の因果関係を聞き手に認識させるという話し手の欲求態度をポイントし、それを正当化するマーカーとなることによって、*you know*発話の関連性があると主張する。

(21)と(22)の*you know*発話も見ても確認したい。

(21) A: Do you know him?

B: I know Ian. He looks very handsome now. He is an actor,

you know?

A: Yeah, his eyes are a very nice colour.

(BNC; *The Meddlers*, 1970より修正)

(21') P = Ian is an actor.

(21'') The speaker wants to confirm to the hearer that he is an actor.

(21''') Because he looks very handsome now.

(22) [ボーイフレンドに2人間の関係を尋ねて]

I thought that we were friends like. **You know**, like boyfriend and girlfriend.

(BNC, *Billy Bayswater*, 1990)

(22') We were like boyfriend and girlfriend.

(22'') The speaker wanted to assert to the hearer that we were like boyfriend and girlfriend.

(22''') Because the speaker thought both the speaker and the hearer were friends.

*You know*発話の話し手であるBはイアンはハンサムである。そしてどのくらいハンサムであるのかということを知りたくて聞き手に「確認」するものである。*You know*の使用によって、話し手Bは表意である(21')からの想定である(21''), 言い換えればメタ表示させた想定(R)を聞き手に高次表意として表示させる。つまり、聞き手に(20)のRである(21'')を探させるといふ指令を出す。そしてその結果、この根拠または証拠が(21'')であることを知らしめる。(22)は(21)とは異なり「言い換え」の意味を持つ解釈とされる。話し手である女の子は、自分とボーイフレンドの間の関係が、過去に彼氏彼女の関係であると思っていたことを相手に認識させたいという思いを伝えることになり、したがって話し手は前発話の内容の言い換えの意味を復元することになる。話し手は*you know*の使用により表意である(22')からメタ表示させた想定(22'')を聞き手に探させるよう指示する。つまり(20)のRである。そしてその根拠として(22''')がある。*You know*発話を用いて言い換えたその根拠として話し手は(22''')とっていたことである。話し手は聞き手も彼氏彼女の関係であったと思っていたことを分かっていたが、それを確かめたいという意図を伝えることになる。

したがって(13), (21)そして(22)は共に、語用論的にメタ表示された想定が文脈情報を取り入れて、異なる意味が復元されると証明することになる。以上, Yamada (2007) の*you know*の分析を多少の修正を加えながら提示した。

4. *You see*の分析

4-1. コンテキスト

*You see*は*you know*と同様に発話の中で様々に現れる。すなわち、「理由」や「主張」、「説得」そして「確認」といった意味を持つと思われる。ここでは*you see*がどのように使われ、どのように理解されるかをそれが現れる構造により以下の様なスキーマに分類し示していきたい。*You know*に倣って、*you see*が現れる節をP、Pとの因果関係を示す節をQとし、PまたはQが明示的に現れない場合 ϕ として示す^(注4)。

- (23) (a) Q, YOU SEE P
 (b) YOU SEE P, Q
 (c) ϕ YOU SEE P
 (d) Q, YOU SEE ϕ

まず*you see*が(23a)のスキーマで現れるコンテキストとして(24)-(26)がある。

- (24) [一目ぼれの経験について問われ、Aは最初は気にもしていなかったのだが]
 A: What happened next was truly funny because, **you see**, I was trying to ask him out on a date.
 (Hiragana Times, 1997より修正)
 (25) [Bが2着のお揃いのセーターを買おうとしているのをAが見て]
 A: Why are you buying two of those sweaters?
 B: I have twins, **you see**, a boy and a girl.
 (26) [キャシーがお菓子を食べておうとして]
 Cathy: Where are the other two?
 Tom: I hate to tell you this, but we won't be able to return

them to you.

Cathy: You've eaten them, **you see**.

Tom: I'm sorry. We were so hungry, we just...

一目ぼれの経験について聞かれた話し手は、先行発話で一目ぼれをして自分がおかしな行動に出たということと言う。そして*you see*を含んだ後続発話で、その結果おかしな行動を顕示的に説明する。*You see*を含む発話Pに対して、先行発話Qはその理由として理解されるのは、*because*節の中にあるからである。しかし、*because*が無くても先行発話の理由として解釈されると思われる。また(25)において、Aの発話から状況的にBはお揃いのセーターを買おうとしているという想定が導出される。AとBの間には共通知識としてBには双子の子どもがいるという想定があると話し手Bは思っていることを伝える。一方、お揃いの二着を買うのは、双子がいるからであるという理由としての解釈も可能である。さらに(27)において、キャシーが残しておくように頼んでおいたお菓子を食べておうとしても見つからない。そこでトムに聞く。トムは言いにくいのだが、もうキャシーが食べる分のお菓子は無いと言いつらそうにいう。そこでキャシーは、*you see*発話よってトムが全て食べてしまったことを伝え、その理由を聞き手に明らかにさせようとする。*You see*を使用することで、先行発話を理由として解釈させ、話し手はPのみならず、その理由を、さらにトムはもう食べることは出来ないといった想定をも伝える。

次に、(23a)とは逆に、(23b)の場合、*you see*発話とその根拠を示す節の因果関係が逆のコンテキストも存在する。(27)がまさにその例だ。なぜ演劇をやっているのかという問いに対する答えの*you see*発話である。

- (27) [奨学金の存在を知っているクラスメイトに、なぜ今演劇をやっているのかと聞かれて]
 There was a scholarship for going to this drama school, **you see**, and I entered it on impulse.
 (BNC; ACE, *Willoughby's Phoney War*, 1991)

この発話は「この演劇学校での奨学金あったことから、衝動的に入学することを決めるきっかけになった」ということを伝える。*You see* P (こ

ではP you see) に対して、後続発話QはPに対する結果として解釈される。つまりyou seeの使用は(24)と同様、PがQの理由となることを聞き手の知識から導き出させているように思われる。

Qが明示的でない場合として、(28)の「理由」提示発話の例を見てみる。

- (28) [男の子が自分の彼女だと思っている女の子に自分たちの関係を聞く]

I have not been thinking of us as a boyfriend and a girlfriend, **you see**.

(BNC; A 6 E, *I was a teenage sex pistols*, 1990)

男の子が、自分の彼女だと思っている女の子に対して、自分たちの関係はどのようなものかと聞いた時の彼女の返答である。女の子は「自分はあなた(男の子)とは彼氏彼女の関係ではない」と明示し、そのことを「もちろんあなたは分かっていると私は思うけれども」といったニュアンスを相手に伝える場面であるyou seeの使用である。彼氏彼女の関係ではないということを主張することで、you seeの使用がPが理由となる事象の表示を聞き手に引き出させることになる。加えて、彼女の想定の中には、単に彼氏彼女の関係ではないということだけでなく、聞き手である男の子は女の子の彼氏になりたいということをも彼女は知っているか、もしくは薄々気づいている。しかしそのことは話し手は分かっている振りをしてる。さらに男の子もそのことを気づいているといった想定群を呼び出させるであろう。

最後に、Pのないyou see単独の使用を見てみよう。

- (29) [日本に長く暮らしている外国の友達に東京で暮らすことについて聞かれて]

Living in Tokyo is quite chaotic, but **you see**. It's never boring!

東京で暮らすことについてどう思うかと聞かれての返答である。話し手はLiving in Tokyo is quite chaoticと言うことで、東京に住むことに否定的な答えを提示する。しかし、you seeの使用により、決して東京での生活はつまらないものではないことを、聞き手に理解させようと説得している

と解釈されよう。この場合、butの使用によって、先行発話のQからの推意として東京に住むところではない、または住みたくないという想定が導き出される。これが、but節の命題と矛盾することを教えられる。したがって、you see節が理由説明とする元表示としてのQは、東京に住みたいという想定である。これに対する理由としてyou see節が解釈される。続く発話が結論で導出する想定を明示的にしているのである。「東京だからあれこれと面白いことがあるだろう」という具体的な事象も解釈に加えるかもしれない。

4-2. You see発話の解釈

ことばによる伝達において、発話は意図と様々な想定を持つ。発話を発するという事は聞き手がその発話を伝えようとしている関連性の保証を受け入れるということである。しかしながら、話し手が意図した顕示的想定をすべて聞き手がたやすく復元するとは限らない。結果として、その発話が聞き手にとって関連性がどうあるのかが分からないことがある。⑦を考えてみると、先行発話が話し手の食べられる菓子が残っていないことを伝え、その理由がyou see発話で与えられている。

- (26) [キャシーがお菓子を食べようとして]

Cathy: Where are the other two?

Tom: I hate to tell you this, but we won't be able to return them to you.

Cathy: You've eaten them, **you see**.

Tom: I'm sorry. We were so hungry, we just...

例えば、話し手は君たちが全部食べてしまったという事実がどんなに重大なことか、聞き手は認識していないと思われる状況を考えてみると、聞き手は要求されている想定を復元し、発せられている発話の関連性を即座に理解することは必ずしもたやすくはない。例えば、聞き手に少しばかりバツの悪い思いをさせたい、最終的に話し手の意図が分かったとき申し訳ない気持ちを持たせたい、という意図を話し手は伝達したいとする。関連性を達成して、意図された想定を復元できないかもしれないと思ったとき伝達が成功したとは言えないだろう。

これを避けるためにどうするか。聞き手にその意図された想定を復元する労力を取るよう余分の手助けをしようとするのが考えられる。これが文頭あるいは文末の*you see*の使用となると考える。(26)のキャシーの*you see*の使用は、聞き手に君たちが食べてしまったことをより顕示的にし、そして聞き手に余分の処理労力をかけさせるが、それによってより豊かな認知効果が持てることを教えると説明する。言い換えると、(26)は話し手の情報意図を、*you see*を使用しない場合に比べて、より強く伝達することになる。もちろん関連性の保証は使用しない場合でもあるのだが、*you see*の使用は関連性の保証を明示的に記号化しているということであり、聞き手は発話の関連性を追加的に手に入れなければ聞き手に思わせるのである。聞き手は関連性の期待を満足させられなければ、導出するよう期待されている推意をもっと探すために、コンテキストを広げていかなければならないということになる。つまり*you see*の使用は、(a) その発話によって伝達される想定 of 真性の中で、聞き手が持っているはずだという信念とそれを確認したいと言う思いを受け入れるよう、聞き手は導かれる。さらに (b) 聞き手は、その発話が理由 (または根拠) となる想定が導出されるようコンテキストを広げていくよう導かれる。コンテキストを広げることは、労力を要求されることであるので、最も経済的に得られなければならない。このために意味論的に記号化されている*you see*を使用するのである。関連性の明確な保証を提供することによって、*you see*は聞き手を認知効果とともに、発話の推意的に伝達されている想定を探そう求められるのである。例えば、(26)においては、

- (30) (a) 話し手が残しておくよう言ったにもかかわらず全部食べてしまった。
 (b) あれだけあったのだから残っているのは当然であろう。
 (c) 僕に残すことを考えなかったのか。

といった想定(30)が伝達されることになる。
 発話(27)の解釈を見てみたい。

- (27) [奨学金の存在を知っているクラスメイトに、なぜ今演劇をやっているのかと聞かれて]

There was a scholarship for going to this drama school, **you see**, and I entered it on impulse.

(BNC; ACE, *Willoughby's Phoney War*, 1991)

ここにあるのは「出来心で入学を決めたのは、奨学金があったからである」という因果関係である。*You see*の使用によって、その発話を理由とする事象の表示 (つまり勢いで入学した) と共に、次のような想定を認知効果として探させる。言い換えれば、*you see*が関連性の保証を記号化しているというのはこのようなことである。

- (31) (a) 演劇をやりたいと思っていたが、その資金の都合が付かなかったことは聞き手もよく知っているはずである。
 (b) 資金のめどがみついたらすぐにでも始めるだろうと聞き手は思っていただろう。
 (c) 演劇はお金にならないから、簡単には (資金のめどでも付かない限り) 始められない。

*You see*がPの中に挿入的に使用されている(25)の解釈を見てみたい。「話し手であるBには双子の子どもがいる。そのために、Bはお揃いのセーターを買うのだ」という因果関係である。(27)と同様にPもQも明示的であると考える。QはAの先行発話から状況的に導出されるB is buying two of those sweatersであり、これをコンテキストに取り入れ、*you see*発話をその理由として解釈するよう聞き手を導く。

- (25) [Bが2着のお揃いのセーターを買おうとしているのをAが見て]
 A : Why are you buying two of those sweaters?
 B : I have twins, **you see**, a boy and a girl.

*You see*の使用が、さらにコンテキストを聞き手に広げさせるよう指示し、例えば次のような想定を解釈に加えることになろう。

- (32) (a) 話し手は、双子の子どもがいるということを知っているはずだ。

- (b) 話し手は、双子ならばお揃いの服を着るのは、普通のことだと思っていることは聞き手も分かっている。
- (c) 話し手は、自分の双子にお揃いの服を着せたいと思っていることを聞き手は分かっているだろうと思っている。

さらに(24)の一目惚れの例も(25)と同様に因果関係を示す。

- (24) [一目惚れの経験について問われ、Aは最初は気にもしていなかったのだが]

A: What happened next was truly funny because, **you see**, I was trying to ask him out on a date.

(Hiragana Times, 1997より修正)

「話し手にとっては、通常ではあり得ない行動にでた。それは気づいたら一目惚れした女の子をデートに誘おうとしていた」という因果関係を構築する。You seeの使用はQの理由・説明のPと共に、聞き手にコンテキストを広げさせ、さらなる想定を呼び出すよう仕向ける。例えば、導出される想定は(33)のようなものであるかもしれない。

- (33) (a) 聞き手はAが恥ずかしがり屋で普段は女の子と話すことも出来ない性格であることを知っていることを、話し手Aは知っている。
- (b) 話し手Aが女の子をデートに誘うなんてことは、通常ならば起こりえないことだと聞き手は知っていると、Aは考えている。
- (c) 話し手Aは、女の子をデートに誘うという思いもよらないことをしたことを、聞き手に認めさせたい。

(24)-(25)のyou seeの使用は、それぞれの(33)-(32)に示したような想定を聞き手に認知効果として探させる。そしてQを根拠に、話し手自身の主張を聞き手に認めさせ、確認させたいという意図を伝える。

面白いのは(28)のようなQが明示的でない例である。

- (28) [男の子が自分の彼女だと思っている女の子に自分たちの関係を聞く]
- I have not been thinking of us as a boyfriend and a girlfriend, **you see**.

(BNC; A 6 E, I was a teenage sex pistols, 1990)

(28)においては、Qが明示的ではないが、顕示的想定が状況としてある。つまり、「二人は恋人のような関係だと見られているという状況」があり、このことを二人はよく認識しているというコンテキストである。You see発話「私は恋人同士と思っていますからね」の元表示は、この状況的想定から来るたとえは次のような推意であろう。

- (34) (a) 話し手は、二人が恋人であるという関係は迷惑である、または困った状況であると考えている。
- (b) 話し手は、聞き手の男の子が、恋人の関係にあると自分は思っていないと気付いているべきであると考えている。
- (c) 話し手は、恋人の関係にあるのが迷惑であることを聞き手に認めさせたい。
- (d) 話し手は、自分が迷惑であると思っていることに聞き手が気付いていると思っている。

You seeの使用は、話し手の主張することの根拠を、コンテキストを広げながら聞き手に探すよう指示するのである。すなわち、自分の主張を十分に認めさせ、確認したいという意図を伝えるのである。

Pが明示的でない(29)の例は元表示のQは明示されている。しかし、その解釈過程はやや複雑である。

- (29) [日本に長く暮らしている外国の友達に東京で暮らすことについて聞かれて]
- Living in Tokyo is quite chaotic, but **you see**. It's never boring!

まず第二発話のbutの使用が、先行発話Q「東京に住むことは煩雑である」という命題から「東京に住みたくないのだろう」という推意Qを導出させ、

さらにQ'と矛盾する想定(東京に住みたい)を聞き手にメタ表示として導き出させる。この*but*節の使用でQ'は破棄される。すなわち、*you see*節の元表示として推論されるのは「東京に住みたい」という推意想定である。元表示「東京に住みたい」の非明示的想定を理由とした「東京に住むことは飽きない」というものである。非明示的Pを推論させ復元させるのである。「東京は飽きることがない」を理由・根拠として「だから住みたい」という結論である。つまり元表示はQそのものでなく、推意想定Q'と矛盾する想定が元表示となるのである。

4-3. *You see*の意味とは—高次表意への手続き的制約

*You see*の使用は、発話の関連性がPが表す理由や確認、説明の対象となる事象にある。これは先行発話(あるいは*you see*発話)に続く発話のQと整合するものであるが、さらに状況的想定を加えるよう聞き手に要請する。この想定群を聞き手は既に知っているはずであると話し手は考えている。したがって、これと呼び出させたいとき、聞き手はコンテキストを広げて探していくという過程を辿ることによって、関連性の保証がなされるのである。

次に、関連性の保証がどのレベルで、いかに表示されるのかの問題について考察しなければならない。関連性理論の意味論は二つの側面で議論される。一つは、(a) 概念を記号化しているのか、手続きを記号化しているのか。もう一つは (b) 表意に関わるのか、推意に関わるのかということである。

第一の問題については、*you see*は一般的に考えて概念を有しているようには思われない。概念構築に貢献する言語表現が持っていると言われる論理的特質は持っていないし、語の持つ合成性 (compositionality) もない (Wilson and Sperber, 1993; 武内, 2011)。3節で議論したように、*you know*と同様*you see*も手続きを記号化していると仮定することにする。次の問題は、手続き的制約が働くレベルは推意ではなく表意であり、命題構築に関与しなものであるから高次表意のレベルにあることも*you know*と同様であると仮定する。

4-2で*you see*を含む発話は、話し手の情報意図(ここではPとその理由、根拠として説明となるQを含む想定群)を即認識してほしい、確認してほしいということ伝えると述べた。したがって、*you see*は話し手の、

発話に対する態度、及び聞き手にこれを分かってもらおう指示を手続き的に記号化していると提案したい。高次表意表示として次の (a) のようなことを構築するよう聞き手を導くと考えられる。さらに、*you see*の記号化していると考え意味として (b) を提示する。

- (35) (a) The speaker wants that her informative intention communicated by utterance U is fully recognized and confirmed by the hearer.
(b) Identify a set of representation which interpretively explains P.

解釈的にPを説明するということは、Pの理由または根拠となる、あるいはPを主張する、説明するメタ表示された表示ということで、これを元表示と呼びたい。先行発話(あるいは*you see*発話に続く発話)Qと整合する想定である。上記(35a)の話し手の態度についての手続き的情報と一致する、具体的な高次表意は次のようなものである。

- (36) (a) The speaker is saying / telling / strongly to the hearer that P.
(b) The speaker is confirming insistently the hearer that P.
(c) The speaker believes that P is shared by the hearer.

再び(26)における*you see*は、聞き手に、お前たちがお菓子を全部食べてしまったことを認識しているかどうかを問うために使用されているのではない。情報意図を聞き手に十分認識してほしい、確認したいという気持ちを伝達するために*you see*を使用している。このように使用される時、その形式の概念的意味は失われ、伝達されることは(30a)のような話し手の態度である。

5. *You know* と *you see* はどう違うのか—二種の手続き的記号化

(20)で導入してきた*you know*の持つ意味を修正して、(35)と平行する(20')として提示したい。

(20*) 修正版you knowの意味：

- (a) The speaker wants that her informative intention communicated by utterance U is fully recognized and shared by the hearer.
 (b) Identify a set of representation which interpretively explains P.

Pを主張する、または説明するPを根拠とする一連のメタ表示された表示、この元表示を同定することによって、聞き手は上記と同様の(次のような)高次表意を構築するよう聞き手に指示する、または聞き手を導くと考えられよう。

- (20*) (a) The speaker is saying / telling strongly that P.
 (b) The speaker is confirming insistently the hearer that P.

You knowとyou seeは共に、話し手と聞き手双方に呼び出し可能な命題の解釈として関連性を有する発話を導くものとして特徴づけられる。言い換えれば、二つの言語形式は、それに続く(あるいはそれを含む)発話Pがメタ表示し、しかもPと何らかの因果関係を持つ元表示Qがあるからこれを推論するよう聞き手に明示的に指示する。上記(36)と(20*)の表示は、それぞれの形式が発話行為表示への概念的貢献を記述する表示に似ていることに注目してほしい。しかしここでの説明は、この表示が、you know, you seeによって記号化された情報を基にして、推論的に補われるものとして見られるということである。すなわち、stronglyやinsistentlyが発話副詞のように見られる場合とは違うのである。

You knowとyou seeの使用が容認されがたいのはどのような時だろうか。恐らく情報意図そのものの関連性があまりないところであろうと思われる。例えば、近所の人とバス停で出会ったときの(37)の発話でのyou knowやyou seeの使用が適切ではないと予測される。

- (37) (a) ??You know, times fly.
 (b) You see, times fly.
 (c) ??It has been cool recently, you know?
 (d) ??It has been cool recently, you see?

明示的な関連性の保証は通常、情報内容にある。つまり表意と推意を通して、発話の関連性は達成される。このことは、発話の関連性が別のところにある場合、すなわち命題内容そのものがない場合、you knowの使用は容認されがたいと思われる。よい例が(37)のような共感伝達(phatic communication)である。共感伝達は発するということに関連性があるのであって、何を伝達するのかという内容にあるのではない。したがって、話し手の情報内容により注目を向けることを意図しているyou knowは使用が不適切である。(37a)-(37d)とも発話解釈が成り立たないと思われる。一方、you seeの使用はどうだろうか。聞き手が確実に時が経つのは早いものという想定を持っていると話し手が確信している状況では(37b)のyou seeの使用が認められるかもしれない。同じ状況においての(37d)のyou seeの使用においても受け入れられないだろう。例えば電話での会話で、最近涼しくなってきたのでゲートボールを再開しましょうといった働きかけを聞き手にする場合であるならば受容されると思われるが、挨拶代わりに発せられる場合においてのこのようなyou seeは(you knowも同様に)全く受け入れられない。つまり、発話を発すること自体に関連性がある場合はその使用が受け入れられないのである。

次に、両形式の違いはどこにあるのか。You seeの場合は、you knowの場合に加えて、その表示が話し手、聞き手に顕示的想定であることを教える(36c)を参照)と主張したい。すなわち、追加的想定として話し手は、聞き手が既にPを真であると信じている、と話し手は思っているのである。聞き手と話し手の認知環境において顕示的想定であるとき、これを一層顕示的にしたいという思いを伝達することになる。一方you know使用の場合、話し手は、聞き手がPを即呼びだし可能であると思っはいるが、認知環境の中に顕示的である共有知識であると話し手が信じているかは疑わしいところがある。したがって共有知識とするよう求めるという意図がyou knowの使用をさせるのである。このことを次の例で見てみよう。

- (38) a. You know, the class was cancelled today.
 b. You see, the class was cancelled today.

ここでのコンテクストとして、先週先生が休講にすると聞いた、後期の始めのシラバスで休講が予定されていた、といった事実があるとする。(a)

はこういった事実を聞き手である友人に呼び出させ、おかげでゆっくり朝ごはんを食べて、クラスが終わる頃の今時分大学へ来たといった想定を元表示として復元させ、さらに、お互い掲示板で確認しなかったが休講であったことは間違いでなかった、お互いの判断は間違っていないかった、といった想定を共有することになる。一方で、(b)の*you see*の使用は、事前の知識の下、掲示板の前においてこれを確かめたというコンテキストになろう。すなわち、休講は確かであったことを主張していると解釈される。

*You see*は確かに聞き手に顕示的想定を導きださせることは説明出来たが、ここで(19)の例を用いて、*you know*の使用が、顕示的想定でない認知環境で行われることを説明することでより説得性を示したい。つまり、(19)においてPは一般的に信じられていることだが、君は知らないかもしれないという話し手の思いがあらう。

- (19) A: I may catch a cold, and need some medicine.
 B: **You know**, they say an apple a day keeps the doctor away?

この*you know*発話は、話し手自身、背景知識として風邪を引かないのは林檎をよく食べているからかもしれないという思いがあり、それを共有するよう求めていると解釈されよう。*You know*の使用は、*you see*のそれとは異なり、聞き手が顕示的想定として既に有しているとは必ずしも信じているとはいえないと考えられる。これが両者の間の大きな違いであろう。

*You know*と*you see*のFillerは、発話の背後にある情報意図を、それはお互いの中にPという情報があると信じていることを含めた意図図であるが、聞き手に認識させたい、確認したいという話し手の希求に関する手続き的情報を記号化しているものとして分析を試みた。何かを発話するとき、発話は自動的に話し手の情報意図を伝達するのであるが、*you know*や*you see*を加えることによって、その情報のみならず、お互い共有したい、またはしているという態度を含めて、間違いなく処理努力に値するものであるという保証を、話し手は聞き手に与えているのである。この意味で、発話の認知効果というより、発話解釈の効率の側面、むしろ処理努力に貢献する表現であるといえよう。談話連結語といわれる*so*や*but*, *moreover*, *nevertheless*などは認知効果の性質や在りかに影響するが、これらとは

違って、Fillerは当該の発話によって聞き手が手に入れるあらゆる情報を探させることを、どの程度喜んで聞き手にさせるかに関わるといえよう。関連性の保証を明示的にすることになるのであるが、それは取りも直さず発話を処理するコンテキストを広げていくことを聞き手に求めるということにもなるのである。人間の認知機構は情報処理を効率よくするよう自動的に仕組まれているというのが関連性理論の主張である。その機能は聞き手の処理努力の量に影響を与えるのであるから、Fillerはこの目的に沿うものであると言っていいたい。

6. おわりに

本論は関連性理論の枠組みにおいて、Yamada (2007) で示された*you know*の分析を紹介し、新たに*you see*の記号化している意味を提示した。また*you see*の議論と並行することで、*you know*の意味も修正を加える形で改変を行った。それぞれの持つ意味として(20')と(35)のように提示した。*You see*や*you know*を含む発話は、話し手の情報意図を聞き手に即座に認識して欲しい、または確認して欲しいということを伝える。それぞれ、高次表意の表示として、(a)のようなことを構築するように聞き手に導き、そして(b)のような意味を記号化している。しかし、両者には違いがある。*You see*の場合は、*you know*の場合に加え、話し手からの表示が、話し手聞き手の間に顕示的想定であることを追加的に提示する。*You know*の使用は、話し手は、聞き手が*you know*発話の命題Pを即呼び出すことが可能であると思っている一方で、*you see*とは異なり、両者の間で想定が必ずしも顕示的に共有されているとは話し手は考えていないということである。*You know*と*you see*は共通の手続きを持つ一方で、追加的に異なる手続きを記号化しているという、いわばdual procedural encodingの例であると主張したい。*You know*と*you see*というFillerと称される語の代表格を、このように関連性理論の枠組みで分析することで、その機能と意味が一樣に説明されることを示した。両者の先行研究で指摘された直観の意味、つまりそれに続く命題内容を聞き手と共有しているという説明は、当該発話の情報内容により注意を払わせるよう聞き手を導くという説明によって、より適切に特徴づけられたといえよう。この分析が正しい方向にあるとすれば、*you know*, *you see*と同様、関連性の保証を明示的に記号化している言語形式の存在が日本語だけでなく他の言語にもあること

を示唆することになるだろう。

*本論の執筆にあたり、武内道子教授（神奈川大学名誉教授）に多大なご助力を賜りました。丁寧に何度も本論文を読んでもくださり、有益なコメントを多数頂きました。改めてこの場を借りてお礼申し上げます。しかしながら、論文内の全ての責任は著者にあります。

注

- (1) 本論の*you know*における議論は全てこのYamada (2007) に準拠する。
- (2) 関連性理論は、Sperber and Wilsonによって提唱され拡大している語用理論である。曖昧であった意味論と語用論の境界線を明確にさせるために、従来までの語用論とは異なり、発話の表意の存在を提示し、非明示的側面（推意）との区別をしている。
- (3) Blakemore (2002) やSchourup (1999, 2001) は*well*の持つプロパティを関連性理論の立場から論じている。Blakemoreによると、*well*は発話の高次表意に関わり、以下のような意味を持つ言語表現であると説明している。
Well: The speaker believes U is relevant (where U is the utterance containing well). (Blakemore, 2002, p148)
 Yamada (2007) での*you know*の議論において、この*well*の議論を基盤に進めた。
- (4) *You see P*と*P you see*は同じものとして扱う。全てスキーマとしてはYOU SEE Pと表記する。

参考文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding utterances: An introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell. 武内道子, 山崎英一訳. 1994. 『ひとはどう発話を理解するかー関連性理論入門ー』東京: ひつじ書房.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and linguistic meaning: The pragmatics and semantics of discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, K. 2006. *Encyclopaedia of language & linguistics. Vol. 3*. Oxford: Elsevier Science.
- Carston, R. 1988. Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics. *Mental representations: The interface between language and reality*. In Ruth Kempson (ed.) Cambridge: Cambridge University Press. 155-181.
- Clark, B. 1993. Let and let's: procedural encoding and explicature. *Lingua*, 90, 173-200.

- Crystal, D. & Davy, D. 1975. *Advanced conversational English*. London: Longman.
- Erman, B. 1987. *Pragmatic expressions in English: A study of you know, you see, and I mean in face-to-face conversation*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Ifantidou-Trouki, E. 1993. Sentence adverbs and relevance. *Lingua*, 90, 173-200.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. 1972. *A grammar of contemporary English*. Harlow: Longman.
- Schiffrin, D. 1986. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, L. 1999. Discourse markers. *Lingua*, 3, 4, 227-65.
- Schourup, L. 2001. Rethinking 'well'. *Journal of Pragmatics*, 33, 1025-60.
- Sperber, D. & Wilson, D. 1995. *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwell. 内田聖二, 中達俊明, 田中圭子 (訳) 1999. 『関連性理論ー伝達と認知』研究社出版.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 武内 道子. 1993. 「言語形式の明示性と表意」『英語青年』2002年7月号. 36-37.
- 武内 道子. 2005. 「関連性への意味論的制約ー「しょせん」と「どうせ」をめぐって」武内道子 (編). 『副詞的表現をめぐってー対照研究』63-87. ひつじ書房.
- 武内 道子. 2011. 「命題態度への意味論的制約ー「ぜんぜん」をめぐって」武内道子 (編). 『発話と文のモダリティ 対照研究の視点から』ひつじ書房. 43-64.
- 武内 道子. 2012. 「表意, 推意, 手続きの記号化」『ことばを見つめてー内田聖二教授退職記念論文集ー』49-63. 英宝社出版.
- Yamada, D. 2007. *English Filler you know: An approach from relevance-theoretic account*. MA dissertation: The University of Leeds, UK. Published in (2008) 『神奈川大学言語と文化論集』第14号. 75-128.
- Wharton, T. 2003. Natural pragmatics and natural codes. *Mind and Language*, 18, 448-477.
- Wilson, D. & Sperber, D. 1993. Linguistic form and relevance. *Lingua*, 90, 1-25.
- 引用データ:
 British National Corpus (BNC)
 ヤック企画. 1997. *The Hiragana Times*. 7月号. 日本洋書販売.